



花のき
盗人

村と
たち

新見南吉

藍岩堂



花のき村と盗人たち



藍岩堂



むかし、^{はな}花の^{むら}き村に、^{にんぐみ}五人組の^{ぬすびと}盗人がやってきました。

それは、^{わかたけ}若竹が、^{そら}あちこちの空に、^{みどりいろ}かぼそく、^めういういしい^{しょか}緑色の芽をのばしている初夏
の^{まつばやし}ひるで、^{まつぜみ}松林では^な松蝉が、ジイジイジイと鳴いていました。

^{ぬすびと}盗人たちは、^{きた}北から^{かわ}川に沿って^そやって^き来ました。花の^{はな}き村の^{むら}入り口の^いあたりに、^{ぐち}すかんぼ
^はやうまご^{みどり}やしの^の生えた^の緑の^{はら}野原で、^{こども}子供や^{うし}牛が^{あそ}遊んで^みおりました。これ^{むら}だけを見ても、この村
が^{へいわ}平和な^{むら}村であることが、^{ぬすびと}盗人たちには^{むら}わかりました。そして、^{かね}こんな村には、^お金^いや^いい
^{きもの}着物^もを持った^{いえ}家があるに^{ちが}違いないと、^{よろこ}もう喜んだので^{あり}ました。

^{かわ}川は^{やぶ}藪の^{した}下を^{なが}流れ、^{すいしや}そこにかかっている一つの^{むら}水車を^{おくふか}ゴトンゴトンと^{まわ}まわして、村の^{おく}奥深
くは^いって^いきました。

^{やぶ}藪の^くところまで^{ぬすびと}来ると、^{ぬすびと}盗人の^{うち}の^{かしら}が、^いいました。

「^{やぶ}それでは、^まわしはこの^{むら}藪の^かかげで^{まち}待っているから、^{むら}おまえらは、村の^{なか}なかへは^いって^いって
^{ようす}様子を見て^こ来い。なに^{ぬすびと}ぶん、おまえらは^{盗人}になったばかりだから、^きへまを^しないように^き気をつ
^{かね}けるんだぞ。金^いの^{あり}あり^みそうな^{いえ}家を見たら、^いえその^い家の^{まど}どの^い窓が^いやぶれ^{いぬ}そうか、その^い家に^{いぬ}犬が
^{かま}いるかどうか、^{かま}よっく^{えもん}しらべるのだぞ。いいか^{かま}釜右^{えもん}門。」

「へえ。」

^{かま}と釜右^{えもん}門が^{こた}答えました。これは^{きのう}昨日まで^{たび}旅ある^{かまし}きの^{かま}釜師で、^{ちゃがま}釜や^{茶釜}をつ^くつ^くっていたので^{あり}ました。

「^{えびのじょう}いいか、海老之丞。」

「へえ。」

^{えびのじょう}と海老之丞が^{こた}答えました。これは^{きのう}昨日まで^{じょうま}錠前屋で、^{いえ}家々の^{くら}倉や^{ながもち}長持などの^{じょう}錠をつ^くつ^くっていたので^{あり}ました。

「^{かくべえ}いいか角兵衛。」

「へえ。」

^{しょうねん}とまだ少年の^{かくべえ}角兵衛が^{こた}答えました。これは^{えちご}越後から^き来た^{かくべえ}角兵衛獅子で、^{きのう}昨日までは、^{いえ}家々の
^{しきい}闘の外で、^{そと}逆立ちしたり、^{さかだ}とんぼが^{もん}えりを^{もん}うったりして、^{ぜに}一文二文の^{もら}銭を^{もら}貰っていたので^{あり}ました。

「^{かんなたろう}いいか^{かんな}鮑太郎。」

「へえ。」

^{かんなたろう}と鮑太郎が^{こた}答えました。これは、^{えど}江戸から^き来た^{だいく}大工の^{むすこ}息子で、^{きのう}昨日までは^{しょこく}諸国の^{てら}お寺や^{じんじや}神社
の^{もん}門などの^みつくりを見て^{まわ}廻り、^{だいく}大工の^{しゅぎょう}修業を^ししていたので^{あり}ました。

「^{おやかた}さあ、^{いっぶく}みんな、いけ。わしは^{いっぶく}親方だから、^{いっぶく}ここで^{いっぶく}一服^{いっぶく}すいながら^{いっぶく}まっている。」

ぬすびと でし かまえもん かまし えびのじょう じょうまえや
そこで盗人の弟子たちが、釜右工門は釜師のふりをし、海老之丞は錠前屋のふりをし、
かくべえ しし ふえ な かなたろう だいく はな むら
角兵衛は獅子まいのように笛をヒャラヒャラ鳴らし、鮑太郎は大工のふりをして、花のき村にはいりこんでいきました。

でし かわ くさ うえ こし でし はな
かしらは弟子どもがいつてしまうと、どっかと川ばたの草の上に腰をおろし、弟子どもに話
ぬすびと かお
したとおり、たばこをスツパ、スツパとすいながら、盗人のような顔つきをしていました。こ
ぬすびと き ぬすびと
れは、ずっとまえから火つけや盗人をして来たほんとうの盗人でありました。

きのう ぬすびと きょう ぬすびと おやかた
「わしも昨日までは、ひとりぼっちの盗人であったが、今日は、はじめて盗人の親方というも
おやかた み しごと でし
のになってしまった。だが、親方になって見ると、これはなかなかいいもんだわい。仕事は弟子
き ね ま
どもがして来てくれるから、こうして寝ころんで待っておればいいわけである。」
とかしらは、することがないので、そんなつまらないひとりごとをいってみたりしていました。

でし かまえもん もど き
やがて弟子の釜右工門が戻って来ました。

「おかしら、おかしら。」

はな からだ お
かしらは、ぴよこんとあざみの花のそばから体を起こしました。

よ さかな あたま き
「えいくそッ、びっくりした。おかしらなどと呼ぶんじゃねえ、魚の頭のように聞こえるじゃ
ねえか。ただかしらといえ。」

ぬすびと でし
盗人になりたての弟子は、

あい
「まことに相すみません。」

とあやまりました。

むら なか ようす
「どうだ、村の中の様子は。」

とかしらがききました。

「へえ、すばらしいですよ、かしら。ありました、ありました。」

なに
「何が。」

おお いえ めした がま と た おおがま
「大きい家がありましてね、その飯炊き釜は、まず三斗ぐらいは炊ける大釜でした。あれは
せに てら つ かね おお
えらい銭になります。それから、お寺に吊ってあった鐘も、なかなか大きなもので、あれをつ
ちやがま め くる うそ おも
ぶせば、まず茶釜が五十はできます。なあと、あっしの眼に狂いはありません。嘘だと思
つく み
うなら、あっしが造って見せましょう。」

ばかばか いば
「馬鹿馬鹿しいことに威張るのはやめろ。」

でし しか
とかしらは弟子を叱りつけました。

かましこんじょう めした がま つ がね み
「きさまは、まだ釜師根性がぬけんからだめだ。そんな飯炊き釜や吊り鐘などばかり見てくる
なん て も あな なべ
やつがあるか。それに何だ、その手に持っている、穴のあいた鍋は。」

あ いえ まえ とお まき き い がき ほ
「へえ、これは、その、或る家の前を通りますと、槇の木が生け垣にこれにかけて干してあり
み しり あな み ぬすびと
ました。見るとこの、尻に穴があいていたのです。それを見たら、じぶんが盗人であることを

わす
つい忘れてしまって、この鍋、二十文でなおしましょう、とそこのおかみさんにってしまった
のです。」

なん
「何というまぬけだ。じぶんのしょうばいは盗人だということをしっかり肚にいれておらん
から、そんなことだ。」

でし おし
と、かしらはかしららしく、弟子に教えました。そして、

むら み こ
「もういっぺん、村にもぐりこんで、しっかり見なおして来い。」

めい かまえもん あな なべ むら
と命じました。釜右エ門は、穴のあいた鍋をぶらんぶらんとふりながら、また村にはいって
きました。

えびのじょう き
こんどは海老之丞がもどって来ました。

むら
「かしら、ここの村はこりゃだめですね。」

えびのじょう ちから
と海老之丞は力なくいいました。

「どうして。」

くら じょう じょう こども じょう
「どの倉にも、錠らしい錠は、ついておりません。子供でもねじきれそうな錠が、ついておるだけです。あれじゃ、こっちのしょうばいにやなりません。」

なん
「こっちのしょうばいというのは何だ。」

じょうまえ や
「へえ、……錠前……屋。」

こんじょう
「きさまもまだ根性がかわっておらんツ。」

とかしらはどなりつけました。

あい
「へえ、相すみません。」

むら くら こども
「そういう村こそ、こっちのしょうばいになるじゃないかッ。倉があって、子供でもねじきれそ
じょう つごう
うな錠しかついておらんというほど、こっちのしょうばいに都合のよいことがあるか。まぬけ
み こ
めが。もういっぺん、見なおして来い。」

むら
「なるほどね。こういう村こそしょうばいになるのですね。」

えびのじょう かんしん むら
と海老之丞は、感心しながら、また村にはいっていきました。

つき き しょうねん かくべえ かくべえ ふえ ふ き
次にかえって来たのは、少年の角兵エでありました。角兵エは、笛を吹きながら来たので、
やぶ む すがた み
まだ藪の向こうで姿の見えないうちから、わかりました。

な ぬすびと おと
「いつまで、ヒャラヒャラと鳴らしておるのか。盗人はなるべく音をたてぬようにしておるものだ。」

しか かくべえ ふ
とかしらは叱りました。角兵エは吹くのをやめました。

なに み き
「それで、きさまは何を見て来たのか。」

かわ い はなしょうぶ にわ さ ちい いえ
「川についてどんどん行きましたら、花菖蒲を庭いちめんに咲かせた小さい家がありました。」

「うん、それから？」

いえ のきした あたま け まゆげ じい
「その家の軒下に、頭の毛も眉毛もあごひげもまっしろな爺さんがいました。」

じい こばん つぼ えん した かく ようす
「うん、その爺さんが、小判のはいった壺でも縁の下に隠していそうな様子だったか。」

じい たけぶえ ふ たけぶえ
「そのお爺さんが竹笛を吹いておりました。ちょっとした、つまらない竹笛だが、とてもええ
ね ふしぎ うつく ね
音がしておりました。あんな、不思議に美しい音ははじめてききました。おれがききとれてい
じい なが きょく れい
たら、爺さんはにこにこしながら、三つ長い曲をきかしてくれました。おれは、お礼に、とん
み
ぼがえりを七へん、つづけざまにやって見せました。」

「やれやれだ。それから？」

「おれが、その笛はいい笛だといったら、^{ふえ} 笛竹^{ふえ}の生えている^{ふえたけ} 竹藪^はを教^{たけやぶ}えてくれました。その^{おし} 竹^{たけ}で作^{つく}った^{ふえ} 笛^{じい}だ^{おし} そうです。それで、お爺^{たけやぶ}さんの^み 教^{たけやぶ}えて^みくれた^{たけやぶ} 竹^{たけやぶ}藪^みへ^みい^{たけやぶ}って^み見^{たけやぶ}ました。ほんとう^{たけやぶ}に^{たけやぶ}ええ^{たけやぶ} 笛^{たけやぶ}竹^{たけやぶ}が、何^{たけやぶ}百^{たけやぶ}す^{たけやぶ}じ^{たけやぶ}も、すい^{たけやぶ}すい^{たけやぶ}と^{たけやぶ}生^{たけやぶ}えて^{たけやぶ}お^{たけやぶ}り^{たけやぶ}ま^{たけやぶ}した。」

「昔^{むかし}、竹^{たけ}の中^{なか}から、金^{きん}の^{ひかり} 光^{はなし}が^{はなし}さ^{はなし}した^{はなし}とい^{はなし}う^{はなし} 話^{はなし}が^{はなし}あ^{はなし}る^{はなし}が、どう^{こぼん}だ、小^{こぼん}判^おでも^お落^おち^おて^おい^おた^おか。

「それから、また^{かわ} 川^{ちい}を^{あま}ど^{あま}ん^{あま}ど^{あま}ん^{あま}く^{あま}だ^{あま}つ^{あま}て^{あま}い^{あま}くと^{あま}小^{あま}さい^{あま} 尼^{あま}寺^{あま}が^{あま}あ^{あま}り^{あま}ま^{あま}した。そ^{あま}こ^{あま}で^{あま}花^{あま}の^{あま} 撓^{あま}が^{あま}あ^{あま}り^{あま}ま^{あま}した。お^{あま}庭^{あま}に^{あま}い^{あま}っ^{あま}ぱ^{あま}い^{あま}人^{あま}が^{あま}い^{あま}て、お^{あま}れ^{あま}の^{あま} 笛^{あま}く^{あま}ら^{あま}い^{あま}の^{あま} 大^{あま}き^{あま}さ^{あま}の^{あま} お^{あま}釈^{あま}迦^{あま}さ^{あま}ま^{あま}に、あ^{あま}ま^{あま} 茶^{あま}の^{あま} 湯^{あま}を^{あま}か^{あま}け^{あま}て^{あま}お^{あま}り^{あま}ま^{あま}した。お^{あま}れ^{あま}も^{あま}い^{あま}っ^{あま}ぱ^{あま}い^{あま}か^{あま}け^{あま}て、そ^{あま}れ^{あま}か^{あま}ら^{あま}い^{あま}っ^{あま}ぱ^{あま}い^{あま}飲^{あま}ま^{あま}し^{あま}て^{あま}も^{あま}ら^{あま}つ^{あま}て^{あま}来^{あま}ま^{あま}した。茶^{あま}わ^{あま}ん^{あま}が^{あま}あ^{あま}る^{あま}な^{あま}ら^{あま}か^{あま}し^{あま}ら^{あま}に^{あま}も^{あま}持^{あま}つ^{あま}て^{あま}来^{あま}て^{あま}あ^{あま}げ^{あま}ま^{あま}した^{あま}の^{あま}に。」

「や^{なん}れ^{なん}や^{なん}れ、何^{なん}とい^{なん}う^{なん} 罪^{なん}の^{なん} ね^{なん}え^{なん} 盗^{なん}人^{なん}だ。そ^{なん}う^{なん}い^{なん}う^{なん} 人^{なん}ご^{なん}み^{なん}の^{なん} 中^{なん}では、人^{なん}の^{なん} ふ^{なん}と^{なん}こ^{なん}ろ^{なん}や^{なん} 袂^{なん}に^{なん}気^{なん}をつ^{なん}け^{なん}る^{なん}も^{なん}の^{なん}だ。と^{なん}ん^{なん}ま^{なん}め^{なん}が、も^{なん}う^{なん}い^{なん}っ^{なん}ぺ^{なん}ん^{なん}き^{なん}さ^{なん}ま^{なん}も^{なん}や^{なん}り^{なん}な^{なん}お^{なん}し^{なん}て^{なん}来^{なん}い。そ^{なん}の^{なん} 笛^{なん}は^{なん}こ^{なん}こ^{なん}へ^{なん}置^{なん}い^{なん}て^{なん}い^{なん}け。」

角^{かく}兵^{べい}卫^{えい}は^{むら}叱^{むら}ら^{むら}れ^{むら}て、^{むら} 笛^{ふえ}を^{ふえ} 草^{くさ}の中^{なか}へ^{むら}お^{むら}き、^{むら} 又^{むら} 村^{むら}に^{むら}は^{むら}い^{むら}っ^{むら}て^{むら}い^{むら}き^{むら}ま^{むら}した。

お^{かえ}し^{かえ}ま^{かえ}い^{かえ}に^{かえ}帰^{かえ}つ^{かえ}て^{かえ}来^{かえ}た^{かえ}の^{かえ}は^{かえ} 鮑^{かえ}太^{かえ}郎^{かえ} でした。

「き^みさ^みま^みも、ろ^みく^みな^みも^みの^みは^み見^みて^み来^みな^みか^みつ^みた^みら^みう。」

と、き^きか^きな^きい^きさ^きき^きから、か^かし^から^かが^かい^かい^かま^かした。

「い^{かね}や、金^{かね}持^{かね}ち^{かね}が^{かね}あ^{かね}り^{かね}ま^{かね}し^{かね}た、金^{かね}持^{かね}ち^{かね}が。」

と 鮑^{かえ}太^{かえ}郎^{かえ} は^{かえ}声^{かえ}を^{かえ}は^{かえ}ず^{かえ}ま^{かえ}せ^{かえ}て^{かえ}い^{かえ}い^{かえ}ま^{かえ}し^{かえ}た。金^{かね}持^{かね}ち^{かね}と^{かね}き^{かね}い^{かね}て、か^かし^から^かは^かに^かこ^かに^かこ^かと^かし^かま^かした。

「お^{かね}お、金^{かね}持^{かね}ち^{かね}か。」

「金^{かね}持^{かね}ち^{かね}で^{かね}す、金^{かね}持^{かね}ち^{かね}で^{かね}す。す^{いえ}ば^{いえ}ら^{いえ}し^{いえ}い^{いえ}り^{いえ}っ^{いえ}ぱ^{いえ}な^{いえ} 家^{いえ}で^{いえ}した。」

「う^うむ。」

「そ^ざの^ざ 座^ざ敷^ざの^ざ 天^{てん}井^{じょう} と^き来^きた^きら、さ^{すぎ}つ^{すぎ}ま^{すぎ}杉^{すぎ}の^{すぎ} 一^{いち}枚^{まい}板^{いた} な^みん^みで、こ^おん^おな^おの^おを^お見^おた^おら、う^おち^おの^お 親^お父^{やじ}は^おど^おんな^おに^お喜^おぶ^おか^おも^お知^おれ^おな^おい、と^お思^おつ^おて、あ^おっ^おし^おは^お見^おと^おれ^おて^おい^おま^おした。」

「へ^{おも}っ、面^{おも}白^{しろ}く^{しろ}も^{しろ}ね^{しろ}え。そ^{てん}れ^{てん}で、そ^くの^く 天^{てん}井^{じょう} を^くは^くず^くし^くて^くで^くも^く来^くる^く気^くか^くい。」

鮑^{かえ}太^{かえ}郎^{かえ} は、じ^ぬぶ^ぬん^ぬが^ぬ 盗^ぬ人^{びと} の^ぬ 弟^{でし}子^{でし}で^ぬあ^ぬつ^ぬた^ぬこ^ぬと^ぬを^ぬ 思^ぬい^ぬ出^ぬし^ぬま^ぬし^ぬた。盗^ぬ人^ぬ の^ぬ 弟^ぬ子^ぬと^ぬして^ぬは、あ^ぬま^ぬり^ぬ気^ぬが^ぬ 利^ぬか^ぬな^ぬか^ぬつ^ぬた^ぬこ^ぬと^ぬが^ぬ わ^ぬか^ぬり、鮑^{かえ}太^{かえ}郎^{かえ} は^{かえ}バ^{かえ}ツ^{かえ}の^{かえ} わ^{かえ}る^{かえ}い^{かえ} 顔^{かえ}を^{かえ}し^{かえ}て^{かえ}う^{かえ}つ^{かえ}む^{かえ}い^{かえ}て^{かえ}し^{かえ}ま^{かえ}い^{かえ}ま^{かえ}し^{かえ}た。

そ^{かえ}こ^{かえ}で^{かえ} 鮑^{かえ}太^{かえ}郎^{かえ} も、も^{むら}う^{むら}い^{むら}ち^{むら}ど^{むら}や^{むら}り^{むら}な^{むら}お^{むら}し^{むら}に^{むら} 村^{むら}に^{むら}は^{むら}い^{むら}っ^{むら}て^{むら}い^{むら}き^{むら}ま^{むら}した。

「や^やれ^やや^やれ^やだ。」

と、ひ^くと^くり^くに^くな^くつ^くた^くか^くし^くら^くは、草^くの^く 中^くへ^く仰^く向^くけ^くに^くひ^くっ^くく^くり^くか^くえ^くつ^くて^くい^くい^くま^くした。

「盗^ぬ人^ぬ の^ぬ か^ぬし^ぬら^ぬとい^ぬう^ぬの^ぬ も^ぬ あ^ぬん^ぬが^ぬい^ぬ 楽^ぬな^ぬし^ぬょう^ぬば^ぬい^ぬで^ぬは^ぬな^ぬい^ぬて。」

とつぜん、

「ぬすとだッ。」

「ぬすとだッ。」

「そら、やっちまえッ。」

という、おおぜいの子供の声がしました。子供の声でも、こういうことを聞いては、盗人としてびっくりしないわけにはいかないので、かしらはひよこんと跳びあがりました。そして、川にとびこんで向こう岸へ逃げようか、藪の中にもぐりこんで、姿をくらまそうか、と、とっさのあいだに考えたのであります。

しかし子供達は、縄切れや、おもちゃの十手をふりまわしながら、あちらへ走っていききました。子供達は盗人ごっこをしていたのでした。

「なんだ、子供達の遊びごとか。」

とかしらは張り合いがぬけていきました。

「遊びごとにしても、盗人ごっこはよくない遊びだ。いまどきの子供はろくなことをしなくなった。あれじゃ、さきが思いやられる。」

じぶんが盗人のくせに、かしらはそんなひとりごとをいながら、また草の中にねころがろうとしたのであります。そのときうしろから、

「おじさん。」

と声をかけられました。ふりかえって見ると、七歳くらいの、かわいらしい男の子が牛の仔をつれて立っていました。顔だちの品のいいところや、手足の白いところを見ると、百姓の子供とは思われません。旦那衆の坊っちゃんが、下男について野あそびに来て、下男にせがんで仔牛を持たせてもらったのかも知れませんが、だがおかしいのは、遠くへでもいく人のように、白い小さい足に、小さい草鞋をはいていることでした。

「この牛、持っていてね。」

かしらが何もいわないさきに、子供はそういつて、ついとそばに来て、赤い手綱をかしらの手にあずけました。

かしらはそこで、何かいおうとして口をもぐもぐやりましたが、まだいい出さないうちに子供は、あちらの子供たちのあとを追って走って行ってしまいました。あの子供たちの仲間になるために、この草鞋をはいた子供はあとをも見ずに行ってしまいました。

ぼけんとしているあいだに牛の仔を持たされてしまったかしらは、くっくつと笑いながら牛の仔を見ました。

たいてい牛の仔というものは、そこらをぴよんぴよんはねまわって、持っているのがやっかいなものです。この牛の仔はまたたいそうおとなしく、ぬれたうるんだ大きな眼をしばたたきながら、かしらのそばに無心に立っているのです。

「くっくっくッ。」

とかしらは、笑いが腹の中からこみあげてくるのが、とまりませんでした。

「これで弟子たちに自慢ができるて。きさまたちが馬鹿づらさげて、村の中をあるいているあいだに、わしはもう牛の仔をいっぴき盗んだ、とって。」

そしてまた、くっくっくッと笑いました。あんまり笑ったので、こんどは涙が出て来ました。

「ああ、おかしい。あんまり笑ったんで涙が出て来やがった。」

ところが、その涙が、流れて流れてとまらないのでありました。

「いや、はや、これはどうしたことだい、わしが涙を流すなんて、これじゃ、まるで泣いてるのと同じじゃないか。」

そうです。ほんとうに、盗人のかしらは泣いていたのであります。——かしらは嬉しかったのです。じぶんは今まで、人から冷たい眼でばかり見られて来ました。じぶんが通ると、人々はそら変なやつが来たといわんばかりに、窓をしめたり、すだれをおろしたりしました。じぶんが声をかけると、笑いながら話しあっていた人たちも、きゅうに仕事のことを思い出したように向こうをむいてしまうのであります。池の面にうかんでいる鯉でさえも、じぶんが岸に立つと、がばッと体をひるがえしてしずんでいくのであります。あるとき猿廻しの背中に負われている猿に、柿の実をくれてやったら、一口もたべずに地べたにすててしまいました。みんながじぶんを嫌っていたのです。みんながじぶんを信用してはくれなかったのです。ところが、この草鞋をはいた子供は、盗人であるじぶんに牛の仔をあずけてくれました。じぶんをいい人間であると思ってくれたのです。またこの仔牛も、じぶんをちっともいやがらず、おとなしくしております。じぶんが母牛でもあるかのように、そばにすりよっています。子供も仔牛も、じぶんを信用しているのです。こんなことは、盗人のじぶんには、はじめてのことです。ひとしんよう人に信用されるというのは、何といううれしいことでありましょう。……

そこで、かしらはいま、美しい心になっているのであります。子供のころにはそういう心になったことがありますが、あれから長い間、わるい汚い心です。久しぶりでかしらは美しい心になりました。これはちょうど、垢まみれの汚い着物を、きゆうに晴れ着にきせかえられたように、奇妙なぐあいでありました。

——かしらの眼から 涙め なみだ が流れてとまらないのはそういうわけなのでした。

やがて夕方ゆうがたになりました。松蝉まつぜみは鳴きやみました。村からは白い夕もやがひっそりと流れだして、野の上の うえにひろがっていきました。子供たちは遠くへいき、「もういいかい。」「まあだよ。」という声こえが、ほかのもの音おととまじりあって、ききわけにくくなりました。

かしらは、もうあの子供が帰って来るじぶんだと思って待っていました。あの子供が来たら、「おいしょ。」と、盗人ぬすびとと思われぬよう、こころよく仔牛をかえしてやろう、と考かんがえていました。

だが、子供たちの声こども こえは、村の中へ消えていってしまいました。草鞋の子供は帰って来ませんでした。村の上にかかっていた月つきが、かがみ職人しよくにんの磨いたばかりの鏡かがみのように、ひかりはじめました。あちらの森もりでふくろうが、二声ふたこえずつくぎって鳴きはじめました。

仔牛はお腹なかがすいて来たのか、からだをかしらにすりよせました。

「だって、しょうがねえよ。わしからは乳ちちは出ねえよ。」

そういつてかしらは、仔牛のぶちの背中せなかをなでていました。まだ眼から 涙め なみだ が出ていました。

そこへ四人にんの弟子でしがいっしょに帰って来ました。

「かしら、ただいま戻りました。おや、この仔牛はどうしたのですか。ははア、やっぱりかしらはただの盗人じゃない。おれたちが村を探りにっていたあいだに、もうひと仕事しちゃったのだね。」

釜右エ門が仔牛を見ていました。かしらは涙にぬれた顔を見られまいとして横をむいたまま、

「うむ、そういつてきさまたちに自慢しようと思っていたんだが、じつはそうじゃねえのだ。これにはわけがあるのだ。」

といました。

「おや、かしら、涙……じゃございませんか。」

と海老之丞が声を落としてききました。

「この、涙でもものは、出はじめると出るもんだな。」

といて、かしらは袖で眼をこすりました。

「かしら、喜んで下せえ、こんどこそは、おれたち四人、しっかり盗人根性になって探つて参りました。釜右エ門は金の茶釜のある家を五軒見とどけますし、海老之丞は、五つの土蔵

の錠をよくしらべて、曲がった釘一本であけられることをたしかめますし、大工のあッしは、この鋸で難なく切れる家尻を五つ見て来ましたし、角兵衛は角兵衛でまた、足駄ばきで跳び越えられる塀を五つ見て来ました。かしら、おれたちはほめて頂きとうございます。」

と鮑太郎が意気こんでいました。しかしかしらは、それに答えないで、

「わしはこの仔牛をあずけられたのだ。ところが、いまだに、取りに来ないので弱っているところだ。すまねえが、おまえら、手わけして、預けていった子供を探してくれねえか。」

「かしら、あずかった仔牛をかえすのですか。」

と釜右エ門が、のみこめないような顔でいました。

「そうだ。」

「盗人でもそんなことをするのでござえますか。」

「それにはわけがあるのだ。これだけはかえすのだ。」

「かしら、もっとしっかり盗人根性になって下せえよ。」

と鮑太郎がいました。

かしらは苦笑いしながら、弟子たちにわけをこまかく話してきかせました。わけをきいて見れば、みんなにはかしの心持ちがよくわかりました。

そこで弟子たちは、こんどは子供をさがしに行くことになりました。

「草鞋わらじをはいた、かわいらしい、七つぐれえの男坊主おとこぼうず なんですわね。」

とねんをおして、四人にんの弟子でしは散ちっていきました。かしらも、もうじっとしておれなくて、仔牛こうしをひきながら、さがしにいきました。

月のあかりに、野茨のいばらとうつぎの白い花しろはながほのかに見えている村むらの夜よるを、五人にんの大人おとなの盗人ぬすびとが、一匹びきの仔牛こうしをひきながら、子供こどもをさがして歩あるいていくのでありました。

かくれんぼのつづきで、まだあの子供こどもがどこかにかくれているかも知れないというので、盗人ぬすびとたちは、みみずなの鳴つじどうている辻堂えんの縁したの下かきや柿きの木うえの上ものおきや、物置なかの中におや、いい匂においのする蜜柑みかんの木きのかげをさがして探さがしてみたのでした。人ひとにきいてもみたのでした。

しかし、ついにあの子供こどもは見みあたりませんでした。百姓達ひやくしょうたちは提燈ちようちんに火ひを入れて来て、仔牛こうしをてらして見みたのですが、こんな仔牛こうしはこの辺あたりでは見みたことがないというのでした。

「かしら、こりゃ夜よっぴて探さがしてもむだらしい、もう止よみましょう。」

と海老之丞えびのじようがくたびれたように、道みちばたの石いしに腰こしをおろしていいました。

「いや、どうしても探さがし出して、あの子供こどもにかえしたいのだ。」

とかしらはききませんでした。

「もう、てだてがありませんよ。ただひとつ残のこっているてだては、村役人むらやくにんのところへ訴うったえることだが、かしらもまさかあそこへは行いきたくないでしょう。」

と釜右工門かまえもんがいました。村役人むらやくにんというのは、いまでいえば駐在巡査ちゆうざいじゆんさのようなものであります。

「うむ、そうか。」

とかしらは考かんがえこみました。そしてしばらく仔牛こうしの頭あたまをなでていましたが、やがて、

「じゃ、そこへ行いこう。」

といました。そしてもう歩あるきだしました。弟子でしたちはびっくりしましたが、ついていくよりしかたがありませんでした。

むらやくにん いえ たずねて 村役人の家へいくと、あらわれたのは、はな さき お 鼻の先に落ちかかるように眼鏡をかけた
ろうじん ぬすびと あんしん 老人でしたので、盗人たちはまず安心しました。これなら、いざというときに、つきとばして
に おも 逃げてしまえばいいと思ったからであります。

こども はな かしらが、子供のことを話して、
こども みうしな こま 「わしら、その子供を見失って困っております。」
といたしました。

ろうじん にん かお み 老人は五人の顔を見まわして、
みう ひと 「いっこう、このあたりで見受けぬ人ばかりだが、どちらから参った。」
とききました。

えど にし ほう 「わしら、江戸から西の方へいくものです。」

ぬすびと 「まさか盗人ではあるまいの。」

たび しよくにん かまし だいく じょうまえや 「いや、とんでもない。わしらはみな旅の職人です。釜師や大工や錠前屋などです。」
とかしらはあわてていました。

へん まえたち ぬすびと ぬすびと もの 「うむ、いや、変なことをいってすまなかった。お前達は盗人ではない。盗人が物をかえす
ぬすびと もの わけがないので。盗人なら、物をあずかれば、これさいわいとくすねていってしまうはずだ。
こころ とど き へん もう いや、せっかくよい心で、そうして届けに来たのを、変なことを申してすまなかった。いや、
やくめ ひと うたが ひと み わしは役目から、人を疑うくせになっているのじゃ。人を見さえすれば、こいつ、かたりじゃ
ないか、すりじゃないかと思うようなわけさ。ま、わるく思わないでくれ。」

ろうじん こうし げなん と老人はいいわけをしてあやまりました。そして、仔牛はあずかっておくことにして、下男に
ものおき ほう 物置の方へつれていかせました。

たび つか さけ にし やかた たろう 「旅で、みなさんお疲れじゃろ、わしはいまいい酒をひとびん西の館の太郎どんからもらっ
つき み えんがわ たので、月を見ながら縁側でやろうとしていたのじゃ。いいところへみなさんこられた。ひとつつ
きあいなされ。」

よ ろうじん にん ぬすびと えんがわ ひとの善い老人はそういって、五人の盗人を縁側につれていきました。

さけ にん ぬすびと ひとり むらやくにん そこで酒をのみはじめましたが、五人の盗人と一人の村役人はすっかり、くつろいで、十
ねん し あ わら はな 年もまえからの知り合いのように、ゆかいに笑ったり話したりしたのであります。

ぬすびと め なみだ き するとまた、盗人のかしらはじぶんの眼が涙をこぼしていることに気がつきました。それを
み ろうじん やくにん 見た老人の役人は、

な じょうご み わら じょうご な ひと み わら 「おまえさんは泣き上戸と見える。わしは笑い上戸で、泣いている人を見るとよけい笑えて
く わる おも わら 来る。どうか悪く思わんでくだされや、笑うから。」

くち わら といって、口をあけて笑うのでした。

「いや、この、^{なみだ}涙というやつは、まことにとめどなく出るものだね。」

とかしらは、^め眼をしばたきながらいました。

それから五人の^{にん}盗人^{ぬすびと}は、^{れい}お礼をいって^{むらやくにん}村役人^{いえ}の家を出ました。

^{もん}門を出て、^{かき}柿の木^きのそばまで来ると、^{なに}何か^{おも}思い出したように、^たかしらが立ちどまりました。

「かしら、^{なに}何か^{わす}忘れものでもしましたか。」

^{かなたろう}と 鮑太郎 がききました。

「うむ、^{わす}忘れもんがある。おまえらも、いっしょにもういっぺん^こ来い。」

と、^{でし}かしらは弟子^{やくにん}をつれて、また^{いえ}役人^{いえ}の家にはいっていきました。

^{ごろうじん}「御老人。」

とかしらは^{えんがわ}縁側^てに手をついていました。

「何だね、^{なん}しんみりと。^な泣き^{じょうご}上戸^てのおくの手^でが出るかな。ははは。」

^{ごろうじん}と 老人^{わら}は笑いました。

「^{ぬすびと}わしらはじつは盗人^{でし}です。わしがかしらでこれらは弟子^{でし}です。」

それをきくと^{ごろうじん}老人^めは眼をまるくしました。

「いや、びっくりなさるのはごもつともです。わしはこんなことを^{はくじょう}白状^{はくじょう}するつもりじゃありませんでした。しかし^{ごろうじん}御老人^{こころ}が^{かた}心^{にんげん}のよいお方^{しん}で、わしらをまっとうな人間^{しん}のように信じていて^{くだ}下さるのを見ては、^みわしはもう^{ごろうじん}御老人^{ごろうじん}をあざむいていることができなくなりました。」

そう、^{ぬすびと}いって盗人^{いま}のかしらは^き今まで^{はくじょう}して来た^{はくじょう}わるいことをみな^{はくじょう}白状^{はくじょう}してしまいました。そしておしまいに、

「だが、これらは、^{きのう}昨日^{でし}わしの弟子^{なに}になったばかりで、まだ^{わる}何も悪いことはしておりません。お^{じひ}慈悲^{ゆる}で、どうぞ、これらだけは許^{くだ}してやって下さい。」
と、いいました。

^{つぎ}次の朝、^{あさ}花^{はな}のき村^{むら}から、^{かまし}釜師^{じょうまえや}と^{だいく}錠前屋^{かくべえじし}と^{ほう}大工^でと^{かくべえじし}角兵衛獅子^{ほう}とが、それぞれべつの方へ出て
^{にん}いきました。四人^{ある}はうつむきがちに、^{かんが}歩いていきました。かれらはかしらのことを^{かんが}考^{かんが}えていま
した。よいかしらであったと思^{おも}っておりました。よいかしらだから、^{さいご}最後^{ぬすびと}にかしらが「盗人^{ぬすびと}に
はもうけっしてなるな。」^{まも}といったことばを、^{おも}守^{おも}らなければならないと思^{おも}っておりました。
^{かくべえ}角兵衛^{かわ}は川^{くさ}のふち^{なか}の草^{ふえ}の中から^{ひろ}笛^なを拾^なって^なヒヤラヒヤラと鳴^ならしていきました。

四

こうして五人の盗人は、改心したのですが、そのもとになったあの子供はいったい誰だったのでしょうか。花のき村の人々は、村を盗人の難から救ってくれた、その子供を探して見たのですが、けっきょくわからなくて、ついには、こういうことにきました、——それは、土橋のたもとにむかしからある小さい地蔵さんだろう。草鞋をはいていたというのがしょうこである。なぜなら、どういうわけか、この地蔵さんには村人たちがよく草鞋をあげるので、ちょうどその日も新しい小さい草鞋が地蔵さんの足もとにあげられてあったのである。——というのでした。

地蔵さんが草鞋をはいて歩いたというのは不思議なことです、世の中にはこれくらい不思議はあってもよいと思われます。それに、これはもうむかしのことなものですから、どうだって、いいわけです。でもこれがもしほんとうだったとすれば、花のき村の人々がみな心のよい人々だったので、地蔵さんが盗人から救ってくれたのです。そうならば、また、村というものは、心のよい人々が住まねばならぬということにもなるのであります。



花のき村と盗人たち

平成二十三年二月十八日 初版

著者

新見 南吉

発行所

藍岩堂